



確かな学力と『資質・能力』

『確かな学力』という言葉が文部科学省が正式な用語として使うようになったのは、平成8年の中央教育審議会（中教審）の答申からだと言われています。

「基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力」と定義されました。

ほぼ10年ごとに改訂される学習指導要領は、平成10年、平成20年に改訂され、さらに今回の改訂を受けて、中学校では昨年度から正式に実施されています。それを踏まえて、様々な取り組みが展開されているのですが、今回の学習指導要領では「学力」という用語ではなく『資質・能力』という用語が多く使われ、過去の改訂以上に重視されています。

学習指導要領では、これまでも「学力」だけでなく『資質・能力』という言葉を用いています。それは「学力」は、学校教育で育成するものであり『資質・能力』は、学校教育の中にとどまらず、生涯にわたって進化・発展することが可能であるという考えがもとになっているからなのです。

学習指導要領には、『資質・能力』について、以下のように書かれています。

■育成をめざす資質・能力の三つの柱

生きて働く「知識・技能」の習得

未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成

学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

学習評価の観点も、従来までの四つから三つの観点になっているのも、この考えに基づいています。

さらに、この考えに至るまでの流れを理解するためには、こんな言葉も覚えておいて欲しいと思います。

『学校ver.1.0』（勉強の時代）

⇒教育を学校が独占し、知識を正確に記憶する基礎学力、忍耐強さが重視される時代

『学校ver.2.0』（学習の時代）

⇒能動的な学び手を育成する「主体的・対話的で深い学び」が基本となる時代

この2つの時代を超えた学校の未来の姿が、『学校ver.3.0』（学びの時代）と呼ばれています。

狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く新たな社会である『Society5.0』。

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムによって、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会である『Society5.0』に対応した学校の未来の姿が『学校ver.3.0』です。

学校の未来の姿を考えたときに、私の脳裏に最初に浮かんだ作品として今回は、1926年生まれの大好きな詩人の作品を紹介しました。

素直な疑問符

吉野 弘

小鳥に声をかけてみた
小鳥は不思議そうに首をかしげた。

わからないから
わからないと
素直にかしげた

あれは

自然な、首のひねり
てらわれない美しい疑問符のかたち。

時に

風の如く

耳もとで鳴る

意味不明な訪れに

私もまた

素直にかしぐ、小鳥の首でありたい。

